

今の時代は、幕末・明治に重ね合わせる
と、いつごろに当たるとの。民主党政
権の挫折が色濃くなった二年ほど前、国会
議員の間でそんな話題が交わされていた。

ある民主党議員は「明治新政府だつて最
初は混乱し、落ち着くまで十年くらいか
かった。今は維新を終えたばかりの明治初
年ごろだ」と語り、「革命新政府」である
民主党政権をもう少し温かく見守ってほし
いと訴えた。

別の自民党議員は「民主党による政権交
代は本当の維新ではない。現在はまた、幕
末の動乱期だ」と述べ、この先に政界再編
を含めた本格的な政変があると主張して
いた。

国会議員は「好きな人物」を聞かれると、
なぜか幕末の志士を挙げる人が多い。「時
代の転換点にいる自分はこの国のために何
ができるか」と、国を憂う志士の気概に自
分を重ね合わせるようなタイプが多いから
なのだろう。

民主党の初代首相となった鳩山由紀夫氏
も、三年前の選挙で「政権交代は革命だ」
と訴えていた。確かに革命を民主政治の中
に制度的に落とし込んだのが政権交代なの
だろう。しかし、政敵を殺してでも、やり
たいことを実現する実際の革命と、政権交
代はやはり違った。選挙で選ばれた民主党
は、さまざまな利害調整に悩み、迷走の印
象を与え続けた。

また振り出しに戻るのか

民主党の歴代政権は、野党やメディアに
批判されるたびに、外交でも、内政でも、
毅然とした対応を取ろうとした。尖閣諸島
をめぐる対中関係で強硬姿勢に出たり、断
固たる増税路線に走ったり。「政権党らし
くある」ことが自己目的化し、行き着いた
先は、野田佳彦首相の言う「決断する政治」。
結局、自民党との違いがほとんど分らない
政党になってしまった。

十二月十六日の衆院選で民主党は国民か
ら見放され、わずか五十七議席の小所帯に
転落した。かつて民主党内には「一度野党
に戻って出直した方がすっきりする」との
声もあったが、本当にもう一度、政権に復
帰する受け皿になれるだけの力が残ってい
るのか、瀬戸際まで押し込められた印象だ。

一九九〇年代の初頭以来、多くの政党が
生まれては消えていった。いったんは政権
まで取った政党が、この先どうなるのか。
国民から「失格」の烙印を押された党の再
生への道のりは、そう楽なものには思えない。

ただ、歴史というのは長い目で見なけれ
ば分からない。冒頭の話のように、自分が
歴史のどういう局面にいるのか、その時代
を生きている人々にとつては、当然ながら、
知りようもないものだ。

豊臣政権というのは、歴史年表で見れば
わずかな幅だが、実際には二十年近く続い
た。そのころの人々にとつては「当然いつ
までもある政権」と思えたかもしれない。

逆に、細川護熙政権が自民党を倒した衝撃
は当時大きかったが、歴史年表の中では、
長い自民党一党支配の時代の「一事件」に
近い扱いとなりつつある。

自民党の安倍晋三氏が国のトップとして
繰り返しテレビに映る姿を見て、不思議な
既視感にかられる。歴史はまた振り出しに
戻ったのか、あるいは政権交代が当たり前
になった時代の幕開けなのか。どちらに進
むかは、これからの民主党の踏ん張り次第だ。

最も大切なのは、やはり党の理念を再構
築することだ。「他人からどう見られるか」
を気にするのではなく、どんな舞台上に立っ
ても、ぶれない軸をきちんと定めなくては
責任政党と言えない。

新自由主義路線なのか、リベラルな社民
主義路線なのか。個人の責任を強調する立
場なのか、社会的な包摂を大切にする立場
なのか。タカか、ハトか。鳩山、菅、野田
と首相が代わるたびに、揺らぎ続け、何を
目指していたのか自らも分からなくなった
ような混乱を整理し直すことだ。

足の引つ張り合いや分裂騒動を見るのは
もうまっぴらだ。あわてず、騒がず、腰を
落ち着けて。この三年間の政権運営が後世
に再評価されるかどうか、今後の対応次
第で変わる。

国民も、選択肢が明確で、健全な政権交
代が繰り返される社会を望んでいるはずだ。

八由▽